

矢羽勝幸

一茶大事典

大修館書店

矢羽勝幸（やば かつゆき）

1945年、長野県東部町西海野に生まれる。

1969年、国学院大学文学部日本文学科卒業。

国立長野工業高等専門学校、上田女子短期大学を経て、

現在、二松学舎大学文学部国文学科助教授（近世文学）。

俳人協会会員。俳誌「秋」同人。

著書『一茶 父の終焉日記・おらが春 他一篇』（岩波文

庫）『一茶の総合研究』（信濃毎日新聞社）『姨捨山の文学』

（同上）『俳人白雄 人と作品』（同上）『一茶全集』（同

上・共編）『新出 近世俳人書簡集』（和泉書院）『加舎白

雄全集』（国文社・共編）『佐久の俳句史』（櫟）ほか。

現住所 長野県上田市大屋622

一茶大事典

© K. Yaba 1993

1993年7月10日 初版発行 定価 6,180 円

（本体 6,000 円・税 180 円）

著 者 矢羽 勝幸

発行者 鈴木 莊夫

発行所 株式会社 大修館書店

（101）東京都千代田区神田錦町 3-24

電話 東京(3295) 6231（販売部）／（3294）2354（編集部）

振替 東京 9-40504

印刷・製本／図書印刷 Printed in Japan

ISBN4-469-01237-8

一茶大事典
目次

生涯	1
幼年時代	3
青年時代	4
壯年時代	8
中年時代	18
老年時代	77
没後	176
作品	183
発句	184
新年の部	
春の部	
夏の部	
秋の部	
冬の部	
一茶発句集 続篇	282

一茶発句集 続篇 上

春之部

夏之部

一茶発句集 続篇 下

秋之部

冬之部

連句

1 ぬる蝶の歌仙

2 鶯の歌仙

3 正月の半歌仙

4 新しき半歌仙

5 蛙なく歌仙

6 何事も半歌仙

7 豆引や歌仙

8 節季候の歌仙

9 薪をこりて歌仙

10 雪除に半歌仙

11 古わらぢ半歌仙

12 夕暮や歌仙

13 松陰に歌仙

14 蚤蠅に歌仙

15 御宝前に歌仙

16 あつさりと歌仙

17 此やうな歌仙

18 小男鹿や歌仙

19 冬ごもり歌仙

20 陽炎や歌仙

21 小座敷の歌仙

22 元日や歌仙

23 信濃方言独吟歌仙

俳文

1 狂人の自害

2 挽歌

3 熊胆事件

4 ありの实

5 父の終焉

6 幼少の記

7 徳本阿闍梨

8 布川の駆落ち者

9 女犯の僧

10 海辺の芥

11 按摩殺し

12 乞食の七夜祝い

380

335

304

285

簡

- 1 森田元夢宛て
- 2 佳好宛て
- 3 小林雪古宛て
- 4 西原文虎宛て
- 5 田川鳳朗(対竹)宛て
- 6 池田関之宛て
- 7 遠藤曰人宛て
- 8 佐藤魚淵宛て
- 9 菊宛て
- 10 李園宛て
- 11 青野太筈宛て
- 12 豊島久臧宛て
- 13 大川斗圀宛て
- 14 長沼門人宛て
- 15 青野太筈宛て

- 16 村役人宛て
- 17 菊宛て
- 18 和尚宛て
- 19 金井杉亭宛て
- 20 小山魯恭宛て
- 21 西島士英宛て
- 22 荒川草水宛て
- 23 湯本希杖・其秋宛て
- 24 久保田春畊宛て
- 25 湯本希杖・其秋宛て

著作解題

刊行書／稿本

関係人物

師匠／妻／友人／門人

一茶関係地図・地名

長野県／新潟県／東京都／千葉県／茨城県／香川県／愛媛県／
熊本県

研究史

1 門人たちの顕彰／2 信州から中央へ／3 興隆期／4 冷却期／

549

527

493

477

5 戦後から現在まで

全国句碑一覧

559

文献目録

575

1 全集・選集／2 複製／3 評釈／4 評伝／5 研究／6 特集雑誌／
7 小説・戯曲

あとがき

589

索引

592

事項索引

592

人名索引

622

発句索引

646

*「二茶発句集統篇」は、清水哲氏との共同研究による。

生涯

凡例

- 一 一茶の生涯を便宜的に
 - 幼少年時代（宝暦一三年—安永五年）
 - 青年時代（安永六年—寛政三年）
 - 壮年時代（寛政四年—同一〇年）
 - 中年時代（寛政一一年—文化九年）
 - 老年時代（文化一〇年—文政一〇年）
- の五期に分け、今日判明する伝記的事実を網羅した。
- 一 不確定な事実、一部推定として掲げたが、多くを省いた。
- 一 出典資料は「」で記事の後に記した。
- 一 一茶と直接無関係だが参考になる俳諧史上の記事は「」で示した。▽印はその年に起きた歴史的事実を示す。

1 幼少年時代（宝暦一三年（一七六三）—安永五年（一七六六））

信越国境に近い北国街道の宿駅柏原に生まれた一茶は、三歳で母を失い、八歳で継母を迎えるが、一〇歳の時義弟仙六が生まれるに及んで継母との仲が悪化、長男として生まれながらやむなく一五歳で江戸奉公に出る。いまだ文学上の芽生えはないが、性格形成の上できわめて重要な時期であった。

保二年八月に他界している。

明和二年（一七六五） 三歳

8—17 母くに没。法名妙栄。

宝暦一三年（一七六三） 一歳

明和五年（一七六八） 六歳

5—5 長野県上水内郡信濃町柏原に出生。本名小林弥太郎。

名乗りは信之。父弥五兵衛（三一歳）は、持ち高六石

五升の本百姓で村内では中の上のランク。母くに、（年

齡不詳）は、柏原の支村仁之倉の村役人筋の宮沢家の

出身。当時の北信濃の習慣として出産は妻の実家で行

うことから仁之倉で生まれたものであろう。後年、同

家の旧屋敷跡に「一茶翁胞衣塚」が建てられた。父母

のほか家族として祖母かながいた。祖父弥五兵衛は寛

春 「我と来て遊べや親のない雀」（おらが春）を作ったとする

が、実は後年の追憶吟。

▽8 佐渡に百姓一揆。

明和七年（一七七〇） 八歳

○上水内郡三水村倉井より継母はつ（一説にさつ）が来る。

明和八年（一七七二）

九歳

10—17 菩提寺明専寺の小丸山墓地に一茶の本家小林弥五右衛門が一族の墓碑（現在一茶の墓といわれている）を建立。

安永元年（一七七二）

一〇歳

5—10 義弟仙六（専六、千六、のち弥兵衛。ここでは仙六に統

2 青年時代（安永六年（一七七七）—寛政三年（一七九一））

家庭内の問題から故郷を出なければならなかった一茶は、人並みの苦勞を重ねた末に俳諧という自己表現の道を見出し、葛飾派という俳諧グループの一員となる。ろくな教養もなかった田舎出の青年が、プロの俳諧師になるまでには、強い野心と努力を要したことであろう。出郷後一〇年にして一茶は同派のリーダー溝口素丸の内弟子となっていた。小林竹阿、

一する）出生。継母と一茶の仲が悪化。

▽1 田沼意次が老中となる。

安永五年（一七七六）

一四歳

8—14 祖母かな没。法名妙信。この人は船山（船岳か）より小林家に嫁した。六六歳。

9 疫病にかかり一時重体。（父の終焉日記別記）

▽平賀源内エレキテルを完成。

森田元夢にも師事し、俳人としては順調なすべり出しである。

安永六年（一七七七）

一五歳

春 江戸へ奉公に出る。頼った先は、寺院、柏原出身の医師、谷中の市川氏の奉公人作治郎等多くの伝承があるが不詳。

○以後天明七年まで消息不明。後年この頃を次のように回想。

巢なし鳥のかなしみはただちに塹に迷ひ、その軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ、あるはおぼつかなき山にまよひ、声をかぎりに呼子鳥、答へる松風さへもの淋しく、木（の）葉を敷寝に夢をむすび、又あやしの浜辺にくれは鳥、人も渚の汐風にからき命を拾ひツゝくるしき月日のおくるうちに、ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囁りおぼゆ。（文政句帖・文政六年一月条）

▽1 北信濃に百姓一揆がおこる。

▽5 農民がみだりに江戸奉公に出るのを禁止。

天明二年（一七八二）

二〇歳

○この頃、松戸市馬橋の油商・俳人大川立砂宅に奉公したという伝承がある。立砂は葛飾派森田元夢（安袋）門人で、この年判者となった（はいかいまつの色）。一茶が後年元夢門人になったのは立砂の手引きによるか。

天明七年（一七八七）

二五歳

春 長野県南佐久郡佐久町上海瀬の新海米翁の米寿記念集

『真佐古』（自的編）に「渭浜庵執筆一茶」として

・是からも未だ幾かへりまつの花

が入集。一茶作品の初出。渭浜庵は、江戸浜町に居住していた幕府書院番、葛飾派のリーダー溝口素丸（「そがん」とも）の庵号。執筆は、俳諧を興行する折の書記役で宗匠見習。ふつう師と同居して（内弟子）雑事も手伝った。

9-7 俳人大島蓼太没。一茶は蓼太と多少交渉があったらしい。（三韓人）

11 江戸（本所か）の二六庵で連歌伝書『白砂人集』（宗養著か）を小林圀橋号で書写。二六庵は素丸と同

門の葛飾派宗匠小林竹阿の庵号でしばらく大阪にいたが、この年、春頃江戸にもどった。一茶はこの竹阿にも師事していた。

▽7 寛政の改革が始まる。

天明八年（一七八八）

二六歳

4 森田元夢編『俳諧五十三駅』に菊明の号で一二句入集。この頃一茶は素丸・竹阿のほかに元夢にも師事していた。

8

法眼苔翁より『俳諧秘伝一紙本定』を譲られ、表紙

に「今日庵内（後に抹消）菊明」、奥書に「蝸牛庵菊明」と署名。今日庵は元夢。苔翁は、葛飾派と親しか

つた平山梅人系の埼玉県三郷市番匠免の人であろう。
〔寛政九年刊、梅人編「ふた夜の月」〕



元夢筆蹟

○この年刊行の『俳諧百名月』（江戸の涼俗系根岸風後篇）に
元夢門下にまじって菊明号で一句入集。

寛政元年（一七八九）

二七歳

1 元夢門人玄阿の立机記念集『はいかい柳の友』に
「今日庵執筆菊明」として一句入集。しかし同書の別
版（松字文庫蔵）では菊明は削られ、今日庵執筆とし
て別の四名が入集しており、何かトラブルのあったこ
とが想定される。

8-9・10 秋田県の名勝象潟に旅行。汐越の肝煎金又左衛
門のもとで宿泊。同家の『旅客集』に揮毫し「東都菊
明」と署名。松島訪問もこの時であろう。『奥羽紀行』
を執筆。（葛飾蕉門分脈系図）

○この年、元夢編『俳諧千題集』、風後編『はな勸進』に菊

明号で入集。

▽10-23 京の高井几童没。寛政期の一茶の書には几童（あ
るいは其角）の模倣のあとがみえる。

寛政二年（一七九〇）

二八歳

▽3-13 江戸本所竹屋弥兵衛方で師の小林竹阿没。享年八
一歳。遺品「二六庵」等の印を一茶が引継ぐ。没後ま
もなく一茶は竹阿の句文集『其日ぐさ』を書写。「菊
明坊一茶書写」と署名し、「二六庵」「一茶」の印を捺
す。正式に許可されたか不明だが、以後享和期まで二
六庵を称す。松本市の百瀬渡氏は一茶旧蔵と伝える
「竹阿」の竹印を所蔵する。（萩原井泉水「一茶を尋ねて」）
4-7 『葛飾蕉門分脈系図』によると溝口素丸に入門したと
いうが「真佐古」の事実とくらべて不審。今後の検討
課題の一つである。

秋 我泉の句を発句に素丸、野逸、素雲、菊露、泰柳、都静、
篁阿ら葛飾派俳人一九名と歌仙を巻く。（秋顔子）

○この年素丸編『夏孟子論』『秋顔子』、児石ら編『霞の碑』
など葛飾俳書に入集。

▽2 出版取締令。

▽5 異学の禁。

▽ 9 初代川柳没。

寛政三年（一七九一）

二九歳

春 素丸の歳旦帖『辛亥元除遍覧』に三句入集〔加藤定彦「下総蕪里の俳人玉斧（下）」〕

春 葛飾派の我泉編『歳旦帖』に「渭浜庵執筆一茶」として一句入集。

3 — 26 素丸に「留別渭浜庵」の文を残し下総・信州へ出発。この日松戸市馬橋（立砂宅か）に泊る。立砂より紙衣をもらう。〔寛政三年紀行・以下同〕

— 29 小金原の牧場、我孫子を通り茨城県北相馬郡利根町布川の馬泉宅に泊る。探題。

4 — 1 茨城県稲取郡河内村田川の疊柳斎一白宅に泊る。

— 2 千葉県香取郡下総町新川の枕流亭で成田市竜台の同門南道がみちのく行脚に立出するにあたってはなむけの句を贈る。

— 5 田川の一白宅に泊る。

— 6 か 7 布川（馬泉宅であろう）に泊る。仁左衛門の新築祝いに「新家記」を執筆。

— 8 市川市行徳より上船、中川の関を経て江戸に入る。

— 9 江戸の俳人冬泉宅に泊る。

— 10 湯島・本郷から中山道を信州にむかう。埼玉県蕨市で大名行列に遭い宿泊に難渋。

— 11 大宮市の氷川神社を遙拝して熊谷市本町の医者三浦玄正宅に泊る。

— 12 熊谷市の蓮生寺参詣後深谷市中瀬の利根川の渡しをこえ群馬県佐波郡境町の本陣織間専車を訪問したが留守。例幣使街道を柴町から五料の渡しを渡り玉村か旧芝根村辺りの農家に一宿。年寄り夫婦の依頼で他界したこの家の息子の供養をするが、名も生年月日も一茶とまったく同じであった（この辺りは創作か）。

— 13 玉村辺から中山道の倉賀野に出、妙義山麓の知人（庄屋）宅に二泊。

— 14 妙義神社参拝。中の岳。石門等の奇勝を探り昨日と同じ庄屋宅に泊る。

— 15 碓氷峠を越え軽井沢に泊る。

— 16 小諸市の布引観音积尊寺に参詣。上田市の蔦屋に泊る。

— 17 坂城町田町の村上義清供養塔を一見、更埴市屋代に泊る。

— 18 犀川が満水のため長野市小市の渡しを渡り善光寺に参詣。開帳。夕方信濃町柏原の生家に帰る。一五歳出郷より一四年ぶりの帰宅である。

・門の木も先づがなし夕涼

以上の旅は後年『寛政三年紀行』としてまとまる。

○帰郷中、父に西国行脚の予定をうちあける。父は西本願寺の代参を依頼。(二茶翁終焉記)

夏 松戸市小金の永妻可長、竜ヶ崎市の杉野翠兄(翠兄と両吟連句を巻く。『連句稿』)、田川の倉橋東水、下総印旛郡山田の円蔵寺許文・山舎、同吉高村の迎福寺風美、同大竹村の吳明、同萩原村の林里鶏等を歴訪、成田市竜台にもどり香取郡大柴町吉岡の大慈寺に既醉を訪い連句を巻いた(『連句稿』)のはこの時であろう。

3 壮年時代 (寛政四年(一七九二)―同一〇年(一七九八))

葛飾派内の研修が終わった一茶は、師素丸らの許しをうけて西国行脚に出立する。近畿、四国など故師竹阿ゆかりの地を巡り、遠く長崎、熊本まで足をのばした。関西の俳壇の自由な気風は、折からの芭蕉百回忌(寛政五年)による派閥止場のムードとあいまって、旅人一茶に多くの刺激を与えた。そして自らの巣立った葛飾俳諧を冷静にみつめなおす好機で

題盆画象瀉

涼しさの浪こゝもとに盆画哉

・畳のかおる合歡の上風

既醉 一茶

また千葉県八日市場市蕪里に大木玉斧を訪い、その『客名録』に揮毫したのもこの時であろう。(加藤定彦「下総蕪里の俳人玉斧(下)」)。千葉県富津市の大乗寺を初めて訪問したのもこの時か。「此寺は二十年あまり折ふしにやどりて物ごとよ所くしくはあらねど」と後年述懐。(我春集)

○9-13 俳人加舎白雄没。一茶は寛政期の一時期意識的に白雄の句風を学んでいる。(寛政句帖)

もあつた。足かけ七年に及ぶ大行脚であつたが、行動の中心は、前期(寛政四〜六)が九州、後期(寛政七〜一〇)は四国、京阪である。そしてこれらの実態は、自筆稿本『寛政句帖』、刊本『たびしうゐ』(以上前期)、自筆稿本『寛政紀行』(西国紀行)『与州播州〇〇雑詠』刊本『さらば笠』等の資料によりかなり精確に把握することができる。旅行者の身でありな